

本研究の目的は、大学生を対象に自由時間行動を構成する因子構造を明らかにすることにある。教員養成系大学の1年生を対象に749名からデータを収集し自由時間行動について集計ならびに統計分析を施した。日本レジャー・レクリエーション協会が開発した「娯楽型」・「発散型」・「生産型」・「休養型」の4タイプ分類をもとに因子構造を明らかにすることにより、より詳細な類型化を図ろうと試みた。

大学生は一過性ではあってもその時間を楽しもうという意識が強く「発散型」の自由時間行動を示す者が多かった。しかしながら「生産型」行動においても「自分で何か作ることが好きである」や「自分の趣味について専門家なみに他の人に説明できる」、「自由に使うことのできる時間に、自分の将来に役立つことをしている」という“探求”的色彩の濃い行動が好まれていることも示唆した。

インターネットや携帯電話の発展から自身に役立つ情報をいち早く入手できる現代では情報収集の知識を有効に活用し自由時間を過ごす大学生が大半となろう。さらにそれらを自身内だけに留め置くだけではなく情報発信するケースも増えていることが推察される。卒業後の進路に対する明確な意思の有無や日々の生活に対する充実感の大小などが自由時間を過ごす上でも生活や行動力に影響を及ぼす。

今日、子どもの体力・運動能力の低下が社会的問題になってきている。その原因の一つに、子どもの運動経験や外遊びの減少が考えられる。近年、二極化傾向を示し、継続して運動やスポーツに参加する子どもと参加しない子どもが存在する。特に児童期の中・高学年の場合、運動に積極的に参加している子どもは習い事としてスポーツに参加する傾向が顕著である。そこで本研究では、神戸市で実施された児童の自由時間に関する意識と行動調査を活用し、スポーツに関する習い事にみられる現状と児童の運動に対する意識について考察し、運動経験の少ない子どもがどのようにすれば運動参加することができるかを検討することを目的とした。習い事の現状は男子で野球、女子で水泳の参加率が最も高かった。習い事の傾向は学年が上がるに連れてスポーツ系の習い事からその他の習い事に移行していた。これは中学受験のための塾や予備校へ移行していることを示している。スポーツ系の習い事参加の阻害要因はその他の習い事参加群で、「生活時間要因」が阻害要因である傾向が強く、習い事をしていない群では、「不足要因」と「態度的要因」が阻害要因である傾向が強いことがわかった。子どもが遊びや自由時間を過ごすとき、3間（時間・空間・仲間）が必要である。個々での不足要因としては3間の中でも空間や仲間を示しており、子どもは特に、空間的要素が不足していると感じている。